

「七日市場の歴史（第五十四回）」

市場があった頃のこと ②

曾根原 孝和

中世末の材木市 市場が成立した時代よりずっと下がりますが、天正十一年（一五八三）八月、松本城主小笠原貞慶が二木豊後守ぶんのかみに与えた書状に「にしまき（西牧）りやうぶん（領分）河にしののしろき「河西の白木」材木・薪、二木之市にて商売すへき事ス」があります。

そして、「二木の市」は、一日市場を指すものとされてきましたが、『三郷村誌Ⅱ』編纂中の研究で、七日市場と考えるのが適当とされてきています。なお、「白木」とは、「黒木」という「皮のついたままの丸太」に対して、「皮をはいだ木地のままの木材」といわれます。

地字ドバシタ 稲核・奈川・大野川などからの材木を運ぶには、川下げによったと考えられます。当時七日市場の東端の上真々部の字は、隣接する豊科真々部（豊科地籍）にもみられ、梓川の河原であり、導水路など設置に好い所でありました。

七日市場に近い上真々部地区の南部巾下はしたには、材木を揚げる所を示す地字「ドバシタ」（土場下・渡場下）があります。近辺に、川下げ諸木を陸揚げし、貯木施設があった証と考えられます。

これらのことから、豊後が書状を得た天正十一年以降は、この河原地は「二木の材木市」として盛況であったことがうかがえます。

なお、関係したと思われる河川には、ここを流れた梓川の分流旧中曾根川、岩岡にて梓川より取水した真鳥羽堰が推測されますが、今後の研究を待ちたいです。

また、小笠原氏の後の石川氏の時代には、樽木川くれきによる堀米（松本市島立）の渡場への転換により「二木の材木市」は消えていったと思われます。

「ドバシタ」のある巾下は、江戸時代に梓川の洪水が何回もあり、下流の五箇村は水神様を祀り安全を祈願しました。



上真々部巾下の水神様遠景